

NEWSLETTER No.63 TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ ISSN1340-5578
Jan.20,2005

THE SOCIETY FOR RESEARCH IN ASIATIC MUSIC

社団法人 東洋音楽学会 会報 第63号

発行(社)東洋音楽学会〔事務所〕〒110-0001 東京都台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号

TEL.03-3823-5173 FAX.03-3823-5174 E-mail LEN03210@nifty.ne.jp

ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/tog/>

目次

大会レポート……………	1	第22回田邊賞アンケートのお願い……………	8
会長就任の挨拶……………	6	会員異動……………	8
通常理事会・総会議決事項のお知らせ……………	6	図書・資料等の受贈……………	10
機関誌編集委員会からのお知らせ……………	7	新刊書籍……………	10
会費納入のお願い……………	8	新発売視聴覚資料……………	11
薦田治子氏が第30回山崎賞を受賞……………	8	編集後記……………	11
小林責氏が法政大学能楽賞を受賞……………	8	第35回通常総会議事録(抄)・添付書類……………	11

第55回大会レポート

(2004年10月23日～24日)

／お茶の水女子大・東京文化財研究所)

第1日(10月23日)

◇公開講演会および演奏「アジア音楽の伝統と現代」

今回のテーマは「伝統の創造」やグローバル化といった近年の大きな問題意識を反映し、またここ数年間の公開講演会におけるテーマ設定を集約的に継承してもいる。しかし本講演会のユニークさは、音楽学者・作曲家・ピアニストが、それぞれ自らの〈営み〉の次元で伝統とどう向かい合っているのかを、実況的に映し出そうという企画意図にあったと思う。以下、私見を交えつつ本講演会をスケッチする。

プログラムの中間に置かれた近藤譲氏の講演「現代の作曲と『伝統』」は、本講演会のいわば総論としての役割を果たしていた。作曲家にとって、伝統は所与の環境としてそこにある一方で、過去から抽出され訓練される規範でもあり、また集団「らしさ」と関係づけられ対象化もされる。さらに作品を追認するものとして参照される伝統もあると述べる。そして自作《オリエント・オリエンテーション》に対する近藤氏自身の説明が、この議論の焦点におかれた。自身がいわゆる邦楽の伝統をまったく知らない時期での創作が、期せずして邦楽の「伝統」に接近していると指摘されてショックを受けたという発言は、所与の内在的な伝統と、伝統を対象化する

る作用が、作曲行為と作品との両方からみつかる様相のリアルな証言であった。

近藤講演は慎重な言葉遣いながら、伝統の実体化・対象化への警告をつねに含んでいたことが印象的であり、これは日本の音楽教育が伝統の実体化を伴う規範主義へと傾きがちな現状に対する鋭い批判と受け取った。

続く小坂圭太氏の公開演奏「内側と外側から見たジャワと中国」では、ドビュッシー、ゴドフスキ、桑桐、そして再びドビュッシーのピアノ作品が取り上げられた。予定にあったブディ・ネグラ作品は残念ながらカットされたが、全体として聞きごたえのある演奏会となった。どの作品にも、近藤氏の述べた「(どこかの) 伝統の対象化」が確かに認められる一方で、たとえばゴドフスキの豪華なピアニズムと、桑桐の楷書風ともいえる様式との対比からは、こうした作品が、楽器に向かう作曲家自身の身体性という「伝統」をも浮き彫りにし得ることが実感された。

順序が逆になるが、プログラムの冒頭には澤田篤子氏の講演「薬師寺最勝会の復興——総合芸術としての儀礼と音楽」が置かれた。最勝会とは薬師寺で平安時代以来営まれてきたが、この500年間断絶していた、論義を主体とする法会である。講演では澤田氏と作曲家・猿谷俊郎氏らによる同法会の復興過程が説明されたが、そこではこの復興が過去の法会の形と現行の声明伝承とを尊重しながらも、「21世紀の最勝会」と

して經典の「精神」を復興するという趣旨が強調された。同法会復興の営みは、最も厳格に「伝統」を重んじるはずの宗教儀礼がつねに創造力の源泉でもあったこと、そして伝統の探求と創造行為とが相互に裏付けあう関係にあることを自ら証明する、今回のテーマに最もふさわしい具体例といえよう。また過去の音楽を研究する者にとってある種の励ましを与える内容でもあったと思う。ただ舞台上で展開された法会を味わい、その全体像を把握するには講演時間が充分でなかったことが惜しまれる。(植村 幸生)

◇田邊尚雄賞授賞式ならびに懇親会・田邊尚雄賞祝賀会

公開講演会に引き続き、第21回田邊尚雄賞授賞式がお茶の水女子大学講堂にて行われた。今回の田邊賞は、高桑いづみ氏の『能の囃子と演出』(東京：音楽之友社、2003年)におくられた。選考委員長の竹内道敬氏による選考経過の説明の後、谷本一之会長より受賞者に賞状と賞金が授与された。高桑氏は、「現在、楽器の調査を行う中で、田邊尚雄先生の『日本の楽器』を参照することが多く、今回その田邊先生にちなんだ賞を受賞できたことは名誉なことであり、また大変うれしい」と受賞者挨拶を行った。

田邊賞授賞式後は、会場を大学の生協食堂マルシェに移し、懇親会ならびに田邊賞受賞祝賀会が行われた。竹内有一氏と福田千絵氏の司会、西日本支部長の月溪恒子氏による乾杯で始まり、お酒やたっぷり準備された食事を楽しみながら、会員同士の交流の輪が広がった。田邊賞祝賀会としては、選考委員長から改めて受賞対象の本についての説明があり、その後、受賞者へのお祝いの言葉が寄せられた。懇親会は、歓談の時間がたっぷりあってあり、落ちついて話をする事ができた。最後に、今回の大会実行委員と学生スタッフの紹介があり、参加者一同から、感謝の拍手がおくられた。まだ飲み足りない、話し足りない人たちは、懇親会後にさらに二次会へと向かったようである。(小塩さとみ)

第2日(10月24日)

大会2日目は、会場を東京文化財研究所に移して行われた。

◇研究発表A1(司会：蒲生郷昭)

「統計資料から見た戦前の東京における邦楽専門家数の推移」(塚原康子)

発表者は、統計資料を用いて、種目別の邦楽専門家の数の推移に注目し、マクロな観点から近代日本の音楽活動の変動を探ろうと考えている。今回の発表では、戦前の東京の民間で活動した邦楽専門家に焦点をあて、2点の統計資料『明治41年東京市市勢調査職業別現在人口表』(1908刊)および『警

視庁統計書』(1904-1936分に「遊芸師匠」「遊芸稼人」として邦楽関係者数を記載)を用い、表やグラフを活用して、その分析結果が示された。

前者の資料には、邦楽の種目別に、教習・実演に携わる専門家の数が記載され、これを1875年の『諸芸人名録』(西村隼太郎)と比較することにより、箏曲指南者の増大、義太夫節の浄瑠璃指南者の減少、女性能楽師や浪曲師の登場などが指摘された。種目による邦楽専門家の居住地に偏りがあること、楽器製造業は特定の地域に集中していることなども、示された。後者の資料は、明治末期から昭和初期にかけての約30年間の記録が残されていることから、種目別の推移が時期を追ってたどれることに特徴がある。邦楽専門家の全般的な減少傾向、関東大震災の影響、都市部から近郊への邦楽専門家の拡散などが指摘された。

資料により統計の目的も異なり、対象の区分や線引きが難しい面もあり、質問もこの点に集中したが、種目ごとの全体的な傾向を数の推移として具体的に示した本報告は、今後この時代の邦楽の歴史を考える上でおおいに参考になるであろう。(薦田治子)

「義太夫狂言の陰囃子

—陰囃子「定型」の確立の経緯をめぐって—(土田牧子)

発表者は、江戸時代末から、昭和に至る歌舞伎の付帳の記載内容を比較検討し、陰囃子の「定型」がどのように確立したかを明らかにしようとする。対象として用いたのは、現行の陰囃子で「定型」とよべる固定したかたちが確立しており、上演頻度が高く、幕末から現在まで10公演以上の付帳が存在している、という3つの条件を満たした義太夫狂言3演目の付帳である。比較検討を通して、明らかになったのは、陰囃子の定型化がみられるのは明治後期から大正初期にかけてであること、それらの定型は明治後期の名優たちが考案したものであった、という2点である。この結果を考察してみると、古典芸能としての歌舞伎の確立、名優の活躍というふたつの状況が、陰囃子の「定型」の形成に大きな影響を与えたことが明確になったと結論付ける。

本発表に対して、今田健太郎氏からは、役者の注文が陰囃子を変えるケースの有無について質問があり、また竹内有一氏の質問に対して、付帳には上演用の長付と、上演後の記録としての本付があることが発表者から説明された。また、高瀬澄子氏より、陰囃子の固定化のメカニズムについて、早稲田みな子氏より、定型の形成とレパートリーの固定化の関係についての質問があった。(薦田治子)

「地歌の半太夫物について」 (野川美穂子)

江戸時代を通じて上方の都市部を中心に広く愛好された三味線伴奏歌曲である地歌には、地域や時代により、さまざまな曲種が生まれた。発表者は、その曲種の一つである半太夫物を取り上げ、初めて「半太夫物」の名称が現れる『松の葉』(1763)以来、地歌古文獻において、半太夫物がどのように記載され、どのような曲がそこに分類されるかを丹念に調査検討して、その歴史を①移入期、②定着期、③確立期、④固定期に区分して示した。

曲種は、地歌の膨大なレパートリーを分類する体系である。言い換えれば、地歌の歴史は、そうした曲種の集積であると考えることが可能である。その意味では、本発表は、半太夫物を例に地歌史を解明する方法論を提示したものであったといえることができる。

地歌は、近世音楽の中ではきわめて重要な種目であるにもかかわらず、その歌詞集である歌本類が膨大な数にのぼることや、また流行歌謡的な性格を持つことなどから、研究の基礎となる文献類の収集や書誌的な研究が、従来、きわめて不十分であった。本発表は、発表者自身による、そうした基礎的な作業の積み重ねの上に行われたものであることを付言しておく。

竹内有一氏による曾我物と半太夫物の関係に関する質問以外に、フロアーからの質問がなかったことは、「地歌」という種目そのものに対する音楽研究者の理解が必ずしも十分でない実情が反映されているように思われた。(薦田治子)

◇研究発表B 1 (司会：尾高暁子)

「荻生徂徠著『幽蘭譜抄』について—徂徠による琴の古譜『碣石調幽蘭第五』研究に関する一考察」(山寺美紀子)

報告者の知る限り、本発表者は荻生徂徠の琴を主軸とした著書を継続して考証し、やがては徂徠著の楽書の一半に近づく。原書を百遍味読し、逐一の証明を丹念にしさえすれば、天下大凡の楽書中の疑問点も晴れようものだが、こうした基本的で地道な作業は凡人楽者には難しいことである。幸い、発表者は各地で蒐集した比較的豊富なデータに恵まれ、調弦法や琴律など、徂徠自身の幽蘭に関する研究の軌跡を明らかにしつつ、同時に本発表と同様のテーマを、ネット上やシンポジウムで概略発表して来た。

『幽蘭譜抄』は、江戸期心越派の琴家といえども座右に置いたほどで、二、三の目録及び、これを引いた1935年刊の『漢学者伝記及著述集覧』に既出する。この度未詳であった徂徠自筆の原本を確認された由、その功に些かも変わりはないが、ただ、その徂徠家所蔵の底本に触れず、徂徠の自筆たる確証

を聴講者に明確にし得ぬ点は瑕瑾であった。

大会後、東博にて折よく国宝の『碣石調幽蘭第五』を鑑賞した眼福の余勢を借って、この講評をものしている。300年に近い過去、徂徠はテーマの書を含む数種の楽書を著したが、自らの意志もあつてか多くは秘され、護園の高弟のみがこれを筆写するを得たため抄写本の遺例も少なく、しかも現代に至るも一として上梓されたものはない。発表者のこうした地道な努力は、何れ古文辞学派の楽論解明の一端ともなり得よう。(坂田進一・坂田古典音楽研究所・旧会員)

「瑟について論じた著作の系譜」 (長井尚子)

「錦瑟端無くも五十絃、一絃一柱華年を思ふ…」と、晩唐の李商隱が絶唱した瑟は擬古であつて、当然、本発表上での唐宋以降に復古された瑟ではない。報告者目睹の瑟は、春秋から戦国期にかけての出土例を除けば、長沙馬王堆一号漢墓では概ね23~25弦、近世実用の瑟に至っては時代はぐっと下り、明朝製と各地の文廟に遺る清朝中期製の二五弦であつた。

中国音楽史上では、古製の瑟は南北朝の頃(420~581)には既に伝を失っていたため、これらを便宜上「古瑟」と呼び、唐宋以降、復古の精神をもって歴代の宮廷及び文廟で実用された瑟と区別される。

発表では、宮廷と文廟以外、即ち「民間で演奏されなくなった楽器が有した役割を考察する…」と、『詩経』その他を引用した古代における瑟の用例、及び『宋史・樂史』と『明会典』中の宮廷での用例を列挙した。後の質疑では譜字のもつ両義性を質されたが、熊朱二『瑟譜』を比較対象し、調弦法(熊譜は十二律、朱譜では五声)と指法及び瑟論の異同とを弁じた。

前述の如く、古代の諸文獻中に散見される瑟と、唐宋以降に古代の瑟を意識した記述とは、理想とした文字面の類似点以上に、既に本質的な差があろうし、皮肉にも、唐宋以降の木瑟は地上にあつて、歴年の風雪に耐得ずして脆くも消滅し去り、時として、遙か昔の古瑟は旧主と併に土中深くにあつて、ふとした機会に現代に蘇る。(坂田進一・坂田古典音楽研究所・旧会員)

◇研究発表A 2 (司会：奥山けい子)

「足利将軍が笙を学ぶということ」 (三島暁子)

この発表は、足利義植の時代を中心とする将軍家と笙とのかわりを論じ、南北朝・室町期における雅楽史の一端を解明しようとするものである。

まず、歴代の足利将軍家が行った御笙始について論じたが、『北野社家日記』の記事を分析し、義植の時代には御笙始と御動座との関連が社会的に認識されていたとしたうえで、将

軍職にある者が儀礼として笙を学ぶ必要性を指摘し、これを積極的に評価すべきであったとした。

つぎに、笙の秘曲「荒序」が、義満以降には將軍家主導で演奏されたことを明らかにした。また、將軍家における笙収集のことに触れ、さらに、足利尊氏の時代には將軍職を象徴する伝承を保有していなかった笙の達智門が、室町後期に御小袖の鎧とともに將軍の武力を象徴する一組として認知されていたことを示した。將軍の権力がゆらぎつつあるこの時勢において笙を学ぶことは、武家の威を鼓舞し高めようとする意図があったとする。質疑では、天皇家と足利家との楽を通じての接近の可能性および関東管領家に対して將軍家が笙を学ぶ意味などが話題となった。(三浦裕子)

「江戸時代における一噌流能管の地方伝承について」

(森田都紀)

この発表は、今日では全国的な統一が見られる能楽笛方の一噌流の技法について、江戸時代の仙台藩における伝承を論じたものである。

伊達文庫所蔵の江戸中期頃の唱歌付三本と、ほぼ同時期に成立した一噌流家元系統の唱歌付における収録曲を一覧し、仮名づかい・囃子事の構造に関して、仙台藩一噌流の独自性を検討した。仮名づかいについては、仙台藩一噌流の唱歌に「イ」を多用する傾向があり、仙台藩に伝わる平岩流との関係が認められたほか、仙台藩一噌流の旋律がやや単調であったと推論し、仙台藩一噌流の唱歌には独特の仮名の用法があったことを指摘した。楽曲構造については、「盤渉楽」に関して、仙台藩一噌流は家元系統の唱歌付と二段目以降が大きく異なっていること、とくに注目すべきこととして、最も重要な旋律を吹く場所が違い、仙台藩一噌流は仙台藩森田流および平岩流と一致していることを指摘した。また、「乱」に関して、仙台藩一噌流は仙台藩森田流および平岩流と同じ構造を持っていたとする。すなわち、仙台藩では一噌・森田・平岩各流の影響関係が認められ、江戸中期までの一噌流は各地においてさまざまな技法を伝承していたことが示された。

質疑ではシテ方の所作との関連から笛の演奏を考える必要性が指摘された。(三浦裕子)

「能楽鼓胴の形態・制作時期についての一考察

—生田コレクションの調査結果を中心に— (高桑いづみ)

近年、その存在が令孫のもとにあると確認された生田耕一コレクションには小鼓胴88点ほかが伝わる。このコレクションに関して平成15年に早稲田大学演劇博物館との共同調査が行われたが、本発表はその報告の一環である。

調査では、鼓胴をX線撮影し内部の数値を計測した。一方、

表面に関しては蒔絵の漆の技法からその年代を比定した。本発表では、この二者のデータを関連させながら、鼓胴の制作年代を推定する方法の有効性が指摘された。また、パワーポイントを使って、蒔絵・カンナ目・ウケ・内部の中心線などに関する写真および図版を提示し、桃山時代より江戸時代各期に見られる鼓胴の特徴を論じた。さらに、研究者によって漆の技法に関する見解が異なること、鼓胴については写しというコピーの存在に注意を払う必要があることに言及した。

鼓胴の音色にかかわる質疑が出たが、楽器調査において、実際の演奏を通じて音色を確認するという作業が困難な場合がある。それを補う意味でも、音楽学以外の研究者との共同研究の意義を再確認する発表であった。(三浦裕子)

◇ 研究発表B2 (司会: 塚田健一)

「近代中国における西洋音楽受容の研究

契機と認識的变化」(新居洋子)

西洋音楽の受容に関わる問題は、日本の近代文化、また世界のさまざまな地域の音楽文化研究に携わる研究者たちが共有する中心的なテーマの一つであろう。そのため、異なった領域を専門とする研究者のあいだでも、活発な議論が生まれる。新居氏の発表は、近代中国における知識階級の言説にみられる西洋音楽の受容についてであった。氏の論法は、中国における西洋音楽との「接触」とその「受容」を区別し、「受容」の開始期を1900年代初期に見出し、中国音楽思想の古楽／新楽と雅楽／俗楽の二項対立が、この従来の音楽認識そのものを否定し、中国音楽を改良するべきという認識に変化したとするもの。当然のことながら、フロアからは、「実践的な音楽現場での受容とのギャップや関係をどう結びつけるのか」(金城氏)、「接触と受容とのあいだに音楽変容という過程があったのでは？」(井上氏)といった質問や意見が出た。新居氏の解答は実践現場との関係のことには意図的に注意を向けずに認識的な面から「受容」捉えることの重要性を強調するものだったが、中国特有の音楽思想界と実践現場との関係の状況説明がほしかった。さらに、「明・清時代の西洋音楽受容との比較」(竹内氏)、「日本で西洋音楽受容との関連」(筆者)などの質問が出たが、西洋音楽の受容を認識的受容の契機という点に絞ったとしても、特定の言述のみから結論が導き出されるのにはいささか疑問が残った。(屋山久美子)

「宗廟における李王職楽部の活動

—1920、1930年代を中心に— (山本華子)

近代アジア諸国の伝統文化の継承と変容の実態、その背景となった文化政策の研究において、植民地時代、独立国家形成時代の行政文書や公文書などの資料収集や分析が進んでい

るようだ。このような研究には、研究者の高度な語学力や幅広い知識、そして当該文化の人々からの信頼が必要に違いない。山本氏の研究は、韓国の代表的な国家文化財、宗廟祭礼の日本植民地時代の実態を、当時宗廟が関与していた貴重な公文書類から丹念に読み取っていくというものであった。資料の情報や分析結果はわかりやすくレジュメに示され、また植民地時代の実態は随時、植民地以前と現行のものと比較しながら親切に説明された。韓国の李王朝文化の祭礼は、独立後、国家の文化財として新しい位置づけがなされ、継承されたというが、山本氏の主張は、その橋渡しに植民地時代の李王職雅楽部の活動が大きな役割を果たしたというものだ。ただ、司会の塚田氏の質問とも関わるが、植民地時代の支配国に追従するかたちで、また王朝の存続を選択しなかった独立国家の韓国で、王朝の儀礼が継承されるという複雑な事態を、国民はどう捉えたのかという疑問が浮かぶ。これは勿論、公文書に書かれているようなものではなく、発表の主旨から逸れるが、韓国人にとっての祭礼音楽の意味を考察する上では重要な問題ではないか。フロアからは王朝文化継承のための経済的基盤、西洋音楽の影響と採譜の状況などについて質問がなされた。(屋山久美子)

「南アフリカ・グリクワ独立教会の人びとにみる日常的な営みとしてのうたうこと」 (海野るみ)

現地での棲み込みフィールドワークを基盤にした南アフリカのうた文化の研究ということで、日本では稀なアフリカ研究に触れる貴重な機会だと期待をもって臨んだ。グリクワ独立教会の成り立ちやその共同体のあるクランズクという土地の地誌、またそこでグリクワの人びとがうたうというものを生活のさまざまな場面で実践していることはスライドの映像などで示され、よくわかった。しかし、グリクワがうたうことの実践に関して、「儀礼的時空間、日常的時空間とのあいだで4つに区分が可能で、一方で、個々の事例からはこの4つの区分の境界はあいまいであり、儀礼的なうたうことの実践が日常的な営みとなっている」とする海野氏の論旨は、論理が堂々巡りをするようで、理解に苦しんだ。フロアからは、うたのレパートリーの内容、歌詞、言語の選択の基本的な情報について質問が相次いだ(瀬山氏、井上氏、筆者)が、解答は、うたうことは歴史性とかかわる・・・など、さらに大掛かりで概念的な説明になっていく。一つ一つの事例やフィールドで得られた事象や問題について、丁寧な解釈を進められ、明確な説明がなされることを望みたい。

最後に、「近代中国」、「植民地時代の韓国」、「南アフリカ」についての3つの発表のセッションでは、フロアと発表者とのあいだを結ぶ質問や議論が活発に行われたことを付け加え

ておきたい。これは、塚田氏の「参与的」な司会に負うところが多い。氏に感謝したい。(屋山久美子)

◇ セッション

『うたう』ことを問い直す—日本の古代・中世の事情から—
はじめに、司会の遠藤徹氏から本セッションを企画した趣旨及び進め方について説明があった。来年(2005年)は『古今和歌集』(905年)及び『新古今和歌集』(1205年)成立から数えて各々節目の年にあたり、和歌の分野はもとより、音楽の分野からも「ウタ」・「うたう」ことについて再考する良い機会であり、特に今回は全体会で一つのテーマの下に事例研究発表という方式を採用し、観点や対象の異なる三者の発表ではあるが、本分野における新たな研究の創造や発展に繋げることを期待する旨が述べられた。

最初に飯島一彦氏の「ウタの都市化・宮廷化の意味」と題する発表があった。飯島氏は日本古代におけるウタの生成過程は、宮廷を通して観ることが大切であるとし、ウタの宮廷化について、①政治的意味の附与、②思想の附与、③美的価値の附与という三つの側面から事例を挙げての考察がなされた。また、古代において宮廷化したウタも、後白河院の頃以降、宮廷の周辺からそれまでと異なる政治的・思想的・美的価値観が内部に流入することにより、中世的なウタに変化していくという展開が示された。

次に、ステイヴン・G・ネルソン氏により「声歌と替え歌—サイバラ(催馬楽/西方楽)と極楽声歌の成立をめぐる—」と題する発表があった。ネルソン氏は、『順次往生講式』のために作られたとされる「西方楽」(金沢文庫蔵『西方楽』)及び「極楽声歌」(天台大原魚山系『極楽声歌』、金沢文庫蔵『楽邦歌詠』)の二つの歌曲を分析し、その成立には、それぞれ「替え歌」という概念が働いていたとする。また、氏は催馬楽の成立に言及し、通説では催馬楽と唐楽や高麗楽との間の同音関係を指摘するものの「旋律」と「歌詞」の関係などについて具体的な説明に欠けるとした上で、催馬楽と唐楽等との間には既に「替え歌」が存在したのではないかとした。更に、声歌を「楽の節・楽の声を人間の声で歌うこと」と定義すれば、「替え歌」という概念の根底には声歌が重要な役割を果たしたと考えられるとし、今後の研究で明らかにしたいとする。

最後に、青柳隆志氏による「詩歌を『うたう』—詩披講をめぐる—」と題する発表が行われた。青柳氏は詩文・和歌を研究する上で、本文研究とともに、「うたう」行為そのものについての検証が重要であるとし、「和歌披講」に比べて研究が進んでいない「詩披講」について、現存する唯一の詩披講譜である明応四年(1495)の詩披講を記録した『為学卿記』

(天理図書館所蔵『綾小路家旧蔵楽書』)を手掛かりに考察を行った。また、新出資料として、昭和初期に催された三つの詩会を記録した霞会館抜講会所蔵詩懐紙三括五十六枚についての紹介がなされた。

三者の発表が終了した後、質疑応答の時間になったが、会場からの質問はなく、発表者の中から二つの質問がなされた。

ネルソン氏が飯島氏に対して、嵯峨・仁明朝頃から宮廷で地方の歌(大嘗祭での風俗歌等)が奏されなくなったという報告に関し、催馬楽の中には風俗歌を基に作られたものがあるが、この説が正しければ、嵯峨・仁明朝以降、このような催馬楽の成立はなくなったと考えるべきかと質問し、飯島氏から、風俗歌と催馬楽の歌詞は同一に考えるべきではなく、地方の歌の歌詞を記録して都に持ち帰り、唐楽又は高麗楽の旋律にのせて催馬楽を作るとは可能であったと回答された。

また、青柳氏は、飯島氏が「平安の宮廷人は細くて高い声を好んだ」と述べたことに関し、この事例は称唯の例であり、朗詠の場合には太々しい声を基本とするなど、全体としてはそのように言い切ることができないのではないかと指摘し、飯島氏は、「細」は「ほそく」以外に「こまやか」又は「くわしく」とも読めるし、また称唯の声に限った評価の可能性もあるとした上で、いずれにせよ声についても時代に応じた宮廷風の感覚や価値観があったことは確かであると回答した。

最後に私見を述べるならば、個々の発表はそれぞれ興味深い内容であったと言えるが、本セッションの趣向であった観点や対象の異なる発表を通して、共通の主題に迫るとい点では物足りなさを感じた。即ち、各発表が『うたう』ことを問い直す」という今回の目的を共有しているとは言いがたく、三者が同一のテーブルに着いた意味・効果がなかったように感じられた。飯島氏の発表が最も標題に則し、内容的にも全体像がみ渡せるものであったが、例えばその中でキーワードとなった「うたの宮廷化」という現象を取り上げ、続く二氏の催馬楽や詩歌についての発表においても考察を行うといった工夫をしていたならば、内容的により深みのあるセッションとなっていたのではないであろうか。(豊永聡美)

会長就任の挨拶

この度、はからずも新理事会の互選で会長の役をお引き受けすることになってしまいました。50代前半の若輩がそのような重責を担うなどということはまことにおこがましいこととは思いましたが、若い世代の会員が増え、新理事の年齢も若返るなかで、ひと昔前の東洋音楽学会であったら考えられないことかもしれませんが、40代、50代の会員が学会運営の中枢を担わなければならない時代がやってきたのかなどの思

いを強くし、微力ながら学会の発展にいくらかでもお役に立てばと、意を決してこの大役をお引き受けすることにいたしました。

わたくしたちの東洋音楽学会は今年で創立68周年を迎え、類似した海外の学会、たとえば、国際伝統音楽学会(ICTM)の創立57周年、あるいはアメリカの民族音楽学会(SEM)の創立49周年と比べても、はるかに長い歴史と伝統をもつ誇るべき学会であります。わたくしたちの先達が築き上げたそのような日本の学術的伝統をこれからどのように着実に継承し発展させてゆくかを、今わたくしたちはそれぞれ研究者として真剣に考えてみなければならない時期に来ているのだらうと思います。たしかに日本音楽の研究にせよ、民族音楽学の研究にせよ、わたくしたちの研究分野は今日、緻密な方法論への志向、新しい研究領域の開拓、斬新な視点の導入など、めざましい発展を遂げつつありますが、その一方で、本学会が各会員にとってそのような最新の研究の有効な情報交換の場になっているかといえますと、かなり疑問が残ります。全国に散らばるべく多くの会員が本学会に所属することの恩恵を同じように受けることができるようになるためには、わたくしたちの学会はどのように変わらなければならないのでしょうか。二年前わたくしが委員長を務めた制度改革検討委員会が今期も大きな任務を負うこととなります。会員皆様のご支援とご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

(塚田健一)

通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2004年10月23日(土)にお茶の水女子大学において第70回通常理事会が、翌24日(日)に東京文化財研究所において第35回通常総会および臨時理事会が開催されました。以下にこれらの会議における議決事項のうち、特記すべきものをお知らせします。なお、通常総会の議決の詳細については、後掲の総会議事録ならびに添付資料をご参照ください。

1) 平成16年度(2004年度)の事業計画の件
後掲の添付書類6(「平成16年度(2004年度)事業計画」)の内容が総会で可決承認されました。

2) 新年度の役員、各種委員会の委員が以下の通り決定しました。

◆理事

[会長] 塚田健一 [副会長] 久保田敏子

[総務] 遠藤徹、小塩さとみ、志村哲、塚田健一、金城厚

[経理] 薦田治子、茂手木潔子

[機関誌] 久保田敏子、田井竜一、寺内直子、樋口昭、藤田隆則

[広報] 小塩さとみ、高桑いづみ、野川美穂子

[東日本支部長] 加藤富美子

[西日本支部長] 寺内直子

[沖縄支部長] 金城厚

◆参事

[本部]

総務担当: 屋山久美子、武内恵美子、土田牧子、鳥谷部輝彦、
中村麻衣子、玉井あや

会報編集担当: 青柳万紀子、金光真理子、佐藤文香、新堀敏
乃、前島美保

[東日本支部]

例会担当: 遠藤懐、東元りか、福田千絵、森田都紀、福田裕
美、藤本寛子、谷口文和

支部だより担当: 黒川真理恵、大木聡美

[西日本支部]

例会・支部だより担当: 今田健太郎、谷正人、寺田真由美

[沖縄支部] 長嶺亮子、外間正樹

◆東日本支部委員

[支部長] 加藤富美子

[例会] 内田順子、加藤富美子、薦田治子、高桑いづみ、塚
田健一、中村美奈子、丹羽幸江、野川美穂子、増野亜子

[経理] 大貫紀子、樋口昭

[支部だより] 遠藤徹、小塩さとみ、加藤富美子

[ホームページ] 小日向英俊、茂手木潔子

◆西日本支部委員

[支部長、総務] 寺内直子

[例会] 井口淳子、上野正章、大谷紀美子、片桐功、寺内直
子、藤井知昭、福岡正太

[経理] 田井竜一

[支部だより] 井口淳子、上野正章、片桐功、福岡正太、藤
田隆則

[ホームページ] 上野正章、志村哲

◆沖縄支部委員

[支部長] 金城厚

新垣亘、梅田英春、久万田晋、比嘉悦子

◆会報編集委員会

青柳万紀子、小塩さとみ、金光真理子、佐藤文香、新堀敏乃、
高桑いづみ、丹羽幸江、野川美穂子、前島美保、松村智郁子

◆機関誌編集委員会

井口はる菜、久保田敏子、志村哲、田井竜一、寺内直子、
樋口昭、藤田隆則

◆情報委員会

上野正章、小塩さとみ、志村哲、中村美奈子、

T.M. ホッフマン

◆改革検討委員会

遠藤徹、金城厚、田井竜一、塚田健一、茂手木潔子

◆ICTM 担当委員会

塚田健一

◆事務所移転問題委員会

遠藤徹、薦田治子、樋口昭

3) 東日本支部、西日本支部の所在地が変わりました。沖縄
支部は前期に同じです。

[東日本支部]

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学音楽・演劇講座 加藤(富)研究室気付

e-mail:katomi@kf6.so-net.ne.jp

TEL/FAX:042-329-7576 (加藤気付)

[西日本支部]

〒657-8501

神戸市灘区鶴甲1-2-1

神戸大学国際文化学部

寺内研究室気付

e-mail:naokotk@kobe-u.ac.jp

fax:078-803-7509 (寺内気付)

[沖縄支部]

〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町1-4

沖縄県立芸術大学音楽学学科室内

TEL:098-882-5034 (金城気付)

e-mail:kansiro@okigei.ac.jp

fax:098-882-5033 (大学総務課)

機関誌編集委員会からのお知らせ

『東洋音楽研究』第69号に掲載しました、特集「伝統音楽
を教えること」、「三 近年刊行された日本音楽の講義用テ
キストをめぐって」に対して、草野妙子氏より、次のような
お申し出がありました。

「NHK邦楽技能者育成会テキスト編纂委員会編『NHK邦
楽技能者育成会四五周年記念 演奏家のための日本音楽の理
論と実践—NHK邦楽技能者育成会四五年の実績をふまえて
—』(東京、NHK邦楽技能者育成会テキスト編纂委員会、
2000年)は、日本放送協会(NHK)の運営費(受信料)を
使用して製作した本ではありません。また、日本放送出版協
会(NHKブックス、NHK出版)とも関係ありません。同
書は財団法人放送文化基金の助成を受けて発行されており、
一般には市販されていません。」

会費納入のお願い

昨年度は今までになく未納会費が多く、新体制で学会の活性化をはかろうとしているときに、活動に制約を迫られ、その結果が新年度にも及んでいます。

2004年度(2004年9月1日～2005年8月31日)までの学会費を未納の方に、請求書(色付き用紙)と振替用紙を同封いたしました。請求書で未納金額をお確かめのうえ、早速お払い込みください。会費の滞納がある場合、その年度の機関誌はお送りできません。

なお、本誌と行き違いに納入がありました場合はどうぞ、ご容赦ください。

薦田治子氏が第30回山崎賞を受賞

平成16年度第30回山崎賞が会員の薦田治子氏に授与されました。山崎賞は農業開発技術者協会(富山市)の活動に賛同して基金を寄せられた哲学者の故山崎正一氏を記念して設けられた学術奨励賞です。平家物語を音楽作品として分析した研究が評価されたことによるものです。授賞式は2004年11月27日、電気ビル(富山市)にて、「日本の伝統音楽研究と平家」と題する薦田氏の講演会とともに行われました。

小林責氏が法政大学能楽賞を受賞

第26回観世寿夫記念法政大学能楽賞が、小林責氏に贈られました。これは、観世流能楽師故観世寿夫氏を記念して法政大学から能楽師及び研究者に贈られる賞で、「近代や地方まで視野に入れた長年にわたる狂言研究」が受賞理由となっています。また、『狂言事典』や『梅若実日記』刊行の功績も高く評価されました。授賞式は2005年1月18日に赤坂プリンスホテルでおこなわれます。

第22回田邊賞アンケートのお願い

第22回田邊賞は、下記の要領で選考・授与されます。その選考対象となる会員の業績について、皆様からの情報を募集致します。会員各位のご協力をお願い致します。

- (1) 選考委員：竹内道敬(委員長)、蒲生美津子、徳丸吉彦、櫻井哲男、薦田治子、以上5名
- (2) 対象期間：2004年1月1日～12月31日
- (3) アンケート締切り：2005年2月10日必着
- (4) アンケート記入事項：著者名、著書名、発行年月日、発行所名、なお、論文の場合は以上のほか、掲載誌名、巻次、編集者名、論文頁数を記入してください。
- (5) アンケート送り先：〒110-0001 東京都台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号室

(社) 東洋音楽学会 第22回田邊尚雄賞選考委員会

会員異動

名簿記載事項の訂正・変更・追加

(2004年8月～11月、訂正箇所は下線部)

- ◆住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡ください。(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用はがき、またはファクス、E-mail等でも結構です)
- ◆改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください。(複数表記される場合、どちらを主な表記にするのか等)
- ◆事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等がある場合には、その旨ご明記ください。

図書・資料等の受贈 (2004年8月~11月、到着順)

☆ は寄贈者(発行者と同一の場合は省略)

- 『浜松市楽器博物館だより』No. 35, 36 浜松市楽器博物館
『The Koto—A traditional instrument in contemporary Japan—』 Henry Johnson 著 Hotei Publishing
『楽道』8, 9, 10, 11月号 正派邦楽会
『白い国の詩』8, 9, 10, 11月号 東北電力(株)
『中島雅楽之都先生略伝(十二)』 吉田倫子著 正派邦楽会
『日本音楽史研究』第5号 上野学園日本音楽資料室
『Bulletin of Vietnamese Institute for Musicology』 No. 12 Vietnamese Institute for Musicology
『平成15年度浜松市楽器博物館年報』浜松市楽器博物館
『ぎふ民俗音楽』第61号 岐阜県民俗音楽学会
『北海道立アイヌ民族文化研究センター年報2003』 北海道立アイヌ民族文化研究センター
『音楽学』第50巻1号 日本音楽学会
『猿田彦大神フォーラム年報 あらわれ』第7号 猿田彦大神フォーラム
『百万達成記念総幹部会・伎楽演奏』 (※カセットテープ) 富士大石寺顕正会 ☆井田直
『アイヌ語地名を歩く—山田秀三の地名研究から—』 北海道立アイヌ民族文化研究センター
『民俗芸能研究』第37号 民俗芸能学会
『地域研究コンソーシアム・ニュース』No. 0 地域研究コンソーシアム

新刊書籍

- 『あらすじで読む古典落語の名作』 野口卓、楽書館、1,260円
『絵でよむ 江戸のくらし風俗大事典』 棚橋正博、村田裕司編、柏書房、15,750円
『小沢昭一がめぐる寄席の世界』 小沢昭一、朝日新聞社、1,680円
『隼人の国の民俗誌2『御田植祭り』と民俗芸能』 下野敏見、岩田書院、9,900円
『桂米朝集成 第1巻』 桂米朝、岩波書店、3,570円
『かぶき創成』 室木弥太郎、風間書房、3,990円
『韓国の学術と文化18『韓国仮面劇 その歴史と原理』』 田耕旭 著、野村伸一監訳、李美江訳、法政大学出版局、6,615円
『京都の狂言師』 茂山千作、世界文化社、3,150円
『組踊入門』 宜保栄治郎、沖縄タイムス社、3,000円
『霜月神楽の祝祭学』 井上隆弘、岩田書院、8,400円
『三味線をはじめよう! 独習でも三味線が弾けるようになる』 津川信子監修、成美堂出版、1,000円
『浄瑠璃素人講釈 下』 杉山茂丸、岩波書店、798円
『浄瑠璃素人講釈 上』 杉山茂丸、岩波書店、798円
『初代桂春団治落語集』 桂春団治、講談社、2,520円
『志ん生復活! 落語大全集 第1巻』 矢野誠一、講談社、5,565円
『滝廉太郎 夭折の響き』 海老沢敏著、岩波書店(岩波新書 新赤版)、740円
『熱撮! 長崎くんち』 三宅善夫撮影、長崎文献社、3,000円
『歴春ふくしま文庫『福島の音楽』』 齋藤秀隆、歴史春秋出版、1,260円
『都新聞 復刻版 大正8年1月~6月』 中日新聞社監修、土方正巳解題、柏書房、262,500円
『民謡秘宝紀行』 齋藤完、白水社、1,890円
『憂鬱と官能を教えた学校(パークリー・メソッド)によって俯瞰される20世紀商業音楽史』 菊地成孔、大谷能生、河出書房新社、3,675円
『四〇〇年目の江戸祭礼(まつり) その風景と情熱の人々』 江都天下祭研究会神田倶楽部編、武蔵野書院、2,857円
『落語ことば辞典 江戸時代をよむ』 榎本滋民、岩波書店、3,045円
『落語の江戸をあるく』 吉田章一、青蛙房、1,890円
『落語 笑いの年輪』 興津要、講談社、1,008円

新発売視聴覚資料

◇DVD

- 『上方漫才まつり 昭和編 1〜3』
キングレコード KIBE-98〜100、3,500円
- 『サ・ヴァ、サ・ヴィアン (b i s...)』
ピエール・パルー監・演、オーマガトキ
(コロムビアミュージック) OMBX-1003、3,990円
- 『中国音楽の世界 伝統と変遷』
コニービデオ、DNN-718、2,625円

◇CD

- 『立川談志ひとり会1-10』日本コロムビア
COCJ-32931-COCJ-32940 各2,000円
- 『祝い邦楽—民謡—』 日本コロムビア COCJ-32926、2,100円
- 『祝い邦楽—琴—』 日本コロムビア COCJ-32925、2,100円
- 『祝い邦楽—特選—』 日本コロムビア COCJ-32924、2,100円
- 『花季利恵 端唄の世界』
日本コロムビア COCJ-32923、2,100円
- 『鼓』望月朴清ビクター伝統文化振興財団 VZCG-348 3,150円
- 『女流義太夫の魅力』
ビクター伝統文化振興財団 VZCG-8293`6 (4枚組) 10,500円
- 『新内 比翼の初旅 桶伏せの段/名残の姿見』
ビクター伝統文化振興財団 VZCG-347、3,150円(税込)
- 『筑前琵琶』
山崎旭萃ビクター伝統文化振興財団 VZCF-1003、3,150円

◇VHS

- 『上方漫才まつり 昭和編 1〜3』キングレコード KIVE-330

編集後記

今回、旧会員坂田進一さんに大会レポートを一部お願いしました。快く引き受けてくださり、深謝申し上げます。

新体制にかわり、さまざまな課題を抱えて船出をすることになりました。会報では、その時々を的確にお伝えしていければと考えています。編集委員会もフレッシュなメンバーを迎えました。二年間、よろしく願いいたします。

次号は5月20日の発行予定です。

会報編集委員会

理事：高桑いづみ、野川美穂子、小塩さとみ

委嘱委員：松村智郁子、丹羽幸江

参事：青柳万紀子、金光真理子、佐藤文香、新堀歎乃、
前島美保

第35回通常総会議事録(抄)・添付書類

1. 日 時：平成16(2004)年10月24日(日)13:20〜14:50
2. 場 所：東京文化財研究所セミナー室
3. 出席者：255名(委任状出席204名を含む)
[備考] 正会員659名、定足数220名
4. 議事事項と審議の経過および結果
定款第25条により谷本一之会長が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで定款施行細則第16条により副議長選出の要請が行われ、上野正章、田井竜一両氏が選出された後、以下の議事を開始した。

第1号議案 役員改選の件

小日向英俊選挙管理委員(森田稔選挙管理委員会委員長代理)が、「役員改選」[添付書類1]について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第2号議案 平成15(2003)年度事業報告の件

遠藤徹理事(総務担当)が、「平成15(2003)年度事業報告」[添付書類2]について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第3号議案 平成15(2003)年度収支決算の件

樋口昭理事(経理担当)が、「平成15(2003)年度収支決算」[添付書類3]について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第4号議案 平成16(2004)年8月31日現在貸借対照表・財産目録の件

樋口昭理事(経理担当)が、「平成16(2004)年8月31日現在貸借対照表・財産目録」[添付書類4]について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。また、竹内道敬監事が「監査報告書」[添付書類8]を朗読説明した。

第5号議案 平成16(2004)年8月31日現在会員異動状況の件

遠藤徹理事(総務担当)が、「平成16(2004)年8月31日現在会員異動状況」[添付書類5]について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第6号議案 平成16(2004)年度事業計画の件
 遠藤徹理事(総務担当)が、「平成16(2004)年度事業計画」[添付書類6]について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

2) 理事
 総票数 1136票
 有効票数 1132票(うち白票99)
 無効票数 4票

第7号議案 平成16(2004)年度収支予算の件
 樋口昭理事(経理担当)が、「平成16(2004)年度収支予算」[添付書類7]について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

順位	得票数	氏名
当選 1	44	薦田 治子
当選 2	36	遠藤 徹
当選 3	33	金城 厚
当選 4	31	塚田 健一
当選 5	28	高桑 いづみ
当選 5	28	野川 美穂子
当選 7	27	久保田 敏子
当選 8	26	茂手木 潔子
当選 9	25	田井 竜一
当選 9	25	樋口 昭
次点 9	25	加藤 富美子
12	23	久万田 晋
12	23	櫻井 哲男
14	20	小塩 さとみ
15	19	藤田 隆則
16	18	谷本 一之
17	17	小柴 はるみ
18	16	大貫 紀子
18	16	山口 修
20	15	寺内 直子
20	15	水野 信男
22	14	福岡 正太

第8号議案 その他
 議長が議場に対して発議を促したが、その他の議案は出されなかった。

[添付書類 1] 役員選出資料

1. 2004年度役員選挙 開票結果

投票締切日 2004年9月9日(木)
 開票日時 2004年9月11日(土)
 午前10時より午後8時30分
 開票場所 東京芸術大学音楽学部5-314室

(1) 監事・理事選挙

有権者数(2004年7月23日現在) 677名
 被選挙権停止者数 7名
 被選挙権休止者数 5名
 投票者数 142名(投票率21.0%)

(13票以下略)

1) 監事

総票数 284票
 有効票数 282票(うち白票27)
 無効票数 2票

* 得票順9位が3名だったため、開票直後に選挙管理委員によって抽選を行った。その結果、田井竜一と樋口昭が当選者、加藤富美子が次点者となった。

(2) 支部委員選挙

順位	得票数	氏名
当選 1	32	竹内 道敬
当選 2	19	山口 修
次点 3	14	谷本 一之
4	11	水野 信男
5	10	柿木 吾郎
5	10	草野 妙子
7	9	久保田 敏子
8	8	薦田 治子
8	8	樋口 昭

(7票以下省略)

1) 東日本支部 支部委員

有権者数(2004年7月23日現在) 395名
 被選挙権停止者数 5名
 被選挙権休止者数 1名
 投票者数 90名(投票率22.8%)

総票数 720票
 有効票数 716票(うち白票88)
 無効票数 4票

順位	得票数	氏名	順位	得票数	氏名
当選 1	30	野川 美穂子	当選 1	4	久万田 晋
当選 2	29	小塩 さとみ	当選 2	3	梅田 英春
当選 3	26	遠藤 徹	当選 2	3	金城 厚
当選 4	23	高桑 いづみ	当選 2	3	比嘉 悦子
当選 5	22	薦田 治子	次点 2	3	大塚 拜子
当選 6	21	柘植 元一			
当選 6	21	茂手木 潔子			
当選 8	19	蒲生 郷昭			
当選 9	18	大貫 紀子			
当選 9	18	小日向 英俊			
次点 11	16	樋口 昭			

* 得票順2位が4名だったため、開票直後に選挙管理委員によって抽選を行った。その結果、梅田英春、金城厚、比嘉悦子の3名が当選者、大塚拜子が次点者となった。

2. 選考過程

(1) 監事・理事選挙

理事・監事の選出については、定款施行細則第8条から第13条までの各条に準拠し、選挙管理委員会の定める選出要項に基づいておこなわれた。

選出要項に定めるところにより、順位9位の者3名については抽選をおこない、加藤富美子を次点に決定した。

選挙管理委員会からの開票結果の報告を受けた会長が、各当選者に当選の通知をすると共に、定款施行細則第8条に基づき、理事当選者10名にたいして、他の5名を合議する会議を招集した。その合議の結果、小塩さとみ、加藤富美子、志村哲、寺内直子、藤田隆則の5名が理事として推薦された。

(2) 支部委員選挙

支部委員の選出については、支部規定第6条に準拠し、選挙管理委員会の定める選出要項に基づいておこなわれた。

1) 東日本支部 支部委員

選挙管理委員会からの開票結果の報告を受けた支部長永原恵三は、各当選者に当選の通知を行った。蒲生郷昭、柘植元一の2名より辞退したい旨の申し出があったので、それを了承し、次点の塚田健一、樋口昭の両名を繰り上げ当選とした。

また、支部長は、支部規定第6条第4項に基づき、支部委員当選者10名にたいして、他の5名を合議する会議を招集した。その合議の結果、内田順子、加藤富美子、中村美奈子、丹羽幸江、増野亜子の5名が支部委員として推薦された。

2) 西日本支部 支部委員

選挙管理委員会からの開票結果の報告を受けた支部長月溪恒子が、各当選者に当選の通知を行った。久保田敏子の辞退(健康上の理由)の申し出を了承し、次点の吉川周平に繰り上げ当選者としての通知を行ったところ、辞退の希望があり、これを了承した。吉川周平の辞退に対する繰り上げ当選者として、志村哲を当選者とした。

2) 西日本支部 支部委員

有権者数(2004年7月23日現在)	225名
被選挙権停止者数	1名
被選挙権休止者数	1名
投票者数	42名(投票率18.7%)
総票数	252票
有効票数	252票(うち白票13)
無効票数	0票

順位	得票数	氏名
当選 1	15	寺内 直子
当選 2	11	藤田 隆則
当選 3	10	久保田 敏子
当選 3	10	田井 竜一
当選 5	8	大谷 紀美子
当選 6	7	福岡 正太
当選 6	7	藤井 知昭
次点 8	6	吉川 周平
	6	志村 哲
	6	寺田 吉孝
	6	水野 信男

* 得票順8位が4名だったため開票直後に選挙管理委員によって抽選を行い、この4人の中の順位を、吉川周平、志村哲、寺田吉孝、水野信男とすることに決定した。その結果、吉川周平が次点者となった。

3) 沖縄支部 支部委員

有権者数(2004年7月23日現在)	24名
被選挙権停止者数	1名
被選挙権休止者数	0名
投票者数	6名(投票率25.0%)
総票数	18票
有効票数	18票(うち白票0)
無効票数	0票

[2] 学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5) 機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款第5条2)

○第69号の編集・刊行

- ・内容 論文(5篇)、研究ノート(2篇)、資料紹介、特集、書評フォーラム、書評・視聴覚資料評・書籍紹介、通信、彙報(定例研究会記録、大会記録、田邊尚雄賞報告、ほか)

(6) 会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

- ・第59号(2003年9月)、第60号(2004年1月)、第61号(2004年5月)
- ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

- ・第3号(2003年9月)、第4号(2004年2月)、第5号(2004年5月20日)
- ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内、定例研究会の報告、その他

○『西日本支部だより』

- ・第48号(2004年1月)、第49号(2004年4月)、第50号(2004年8月31日)
- ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内、定例研究会記録、支部会員への諸通知、その他

○『沖縄支部通信』

- ・第30号(2003年12月)、第31号(2004年4月)
- ・内容 定例研究会要旨と質疑応答記録

[3] 関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)

(7) 日本学術会議への協力

○会員山口修氏を芸術学研究連絡委員会委員として派遣

(8) ユネスコ国際音楽評議会(IMC)日本国内委員会へ参加

○会員柘植元一氏を理事として派遣

(9) 音楽文献目録委員会への参加

○会員奥山けい子、田中多佳子、蒲生郷昭(2004年3月31日まで)、根岸正海(2004年4月1日から)の3氏を委員として派遣

(10) 国際伝統音楽学会(ICTM)への協力

○日本国内委員会として加盟

[4] 研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)

(11) 「田邊尚雄賞」

○第20回田邊尚雄賞の授賞

- ・日時 2003年10月25日
- ・授賞者および授賞対象

根岸正海『宮古路節の研究』(南窓社 2002年2月発行)

福岡まどか『ジャワの仮面舞踊』(勁草書房 2002年2月発行)

・賞金 各50,000円

○第21回田邊尚雄賞の選考と発表

・授賞者および授賞対象 高桑いづみ『能の囃子と演出』(音楽之友社 2003年3月発行)

[5] 研究および調査(定款第5条5)

(12) 国内または国外における学術調査および研究
とくになし

[6] その他目的を達成するために必要な事項

(定款第5条6)

(13) 東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

(14) 事務所移転に関する調査・検討

(「2 処務の概要」以下は省略)

【添付書類6】

平成16年度(2004年度)事業計画

(自平成16年(2004年)9月1日

至平成17年(2005年)8月31日)

1. 事業の状況

[1] 研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1) 公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2004年10月23日
- ・会場 お茶の水女子大学
- ・課題 「アジア音楽の伝統と現代」

(2) 研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2004年10月24日
- ・会場 東京文化財研究所
- ・発表件数 12件、セッション 1件

(3) 次年度大会の準備

- ・日時 2005年10月(予定)
- ・会場 未定

(4) 定例研究会(定款施行細則第3条3)

○東日本支部

- ・回数 6回(12・2・3・4・6・7月)
- ・会場 東京藝術大学音楽学部、お茶の水女子大学、ほか
- ・内容 シンポジウム、研究発表、卒論・修論発表
- ・備考 日本音楽学会関東支部との合同例会は必要があれば開催し、定期的には開催しない。

○西日本支部

- ・回数 5回(9・11・2・4・6月)

- ・会場 国立民族学博物館、ほか
- ・内容 卒業論文・修士論文発表、パネル、シンポジウム、講演

○沖縄支部

- ・回数 3回(12月・2・6月)
- ・会場 沖縄県立芸術大学
- ・内容 卒業論文・修士論文発表、研究発表、講座

[2] 学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5) 機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款第5条2)

○第70号の編集・刊行

- ・内容 会員の論文、研究ノート、調査報告、通信、書評・視聴覚資料評、大会・研究会記録、田邊尚雄賞記録

(6) 会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

- ・第62号(2004年9月)、第63号(2005年1月)、第64号(2005年5月)
- ・内容 会員へ諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

- ・第6号(2004年9月)、第7号(2005年2月)、第8号(2005年5月)
- ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内、定例研究会の報告、その他

○『西日本支部だより』

- ・年3回(第51号~第53号)
- ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内、定例研究会記録、支部会員への諸通信

○『沖縄支部通信』

- ・年2回(第32号、第33号)
- ・内容 定例研究会案内、定例研究会要旨と質疑応答記録、その他

[3] 関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)

(7) 日本学術会議への協力

○会員一名を芸術学研究連絡委員会委員として派遣

(8) ユネスコ国際音楽評議会(IMC)日本国内委員会へ参加

○会員一名を理事として派遣

(9) 音楽文献目録委員会への参加

○会員三名を委員として派遣

(10) 国際伝統音楽学会(ICTM)への協力

○日本国内委員会として加盟

[4] 研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)

(11) 「田邊尚雄賞」

○第21回田邊尚雄賞の授賞

- ・日時 2004年10月23日
- ・授賞者および授賞対象 高桑いづみ『能の囃子と演出』(音楽之友社 2003年3月発行)
- ・賞金 100,000円

○第22回田邊尚雄賞の選考と発表(2005年4月予定)

[5] 研究および調査(定款第5条5)

(12) 国内または国外における学術調査および研究

[6] その他目的を達成するために必要な事項

(定款第5条6)

(13) 東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報提供

(14) 事務所移転に関する調査・検討

【添付書類8】

社団法人東洋音楽学会会長 谷本一之殿

監査報告書

社団法人東洋音楽学会の平成15年度財産の状況ならびに、業務執行の状況を監査しましたが、健全に運営されていることを認めます。

平成16年9月29日

監事 竹内道敬

監事 徳丸吉彦